うどん県？それだけじゃないアート県

「うどん県。それだけじゃない香川県」をキャッチフレーズに掲げる香川。「じゃ、ほかに何が？」と尋ねられ、「うーん…」と言いよどむ月日が長く続いたが、近年は「実はアート県なんですよ」と、やや食い気味に答えられるようになった。その「アート立県」の代表格で、インバウンドも牽引しているのが瀬戸内国際芸術祭、通称「瀬戸芸」だ。

2010年を皮切りに、3年ごとのトリエンナーレ方式で開催し、来年が4回目。香川、岡山両県の島々を主な舞台に各国のアーティストが空間芸術を展開し、来場者は約100万人を数える。

そもそもは「海の復権」を旗印に、島を元気にしたいという福武總一郎氏（ベネッセホールディングス名誉顧問）の強い願いから始まった、いわば地域創生のプロジェクトだが、回を重ねるごとに外国人客の数が増え、観光庁発表の外国人宿泊者数（2017年調査）では、香川県の過去5年間の伸び率が10・5倍で全国1位に。イサム・ノグチ庭園美術館や猪熊弦一郎現代美術館などとの回遊ルートも人気を集め、瀬戸芸と瀬戸内海の存在感はむしろ海外で高まっている感すらある。

思えば、瀬戸内海を一つのまとまりとして、その魅力を最初に発見したのも海外の目だった。幕末から明治初期にかけて来日した欧米の地理学者や旅行業者らが比類なき景観として世界に喧伝したのが嚆矢だ。およそ150年の時を経て、再び海外からの照射によって「瀬戸内」が浮かび上がっていることに歴史の因縁を感じる。

瀬戸芸効果は観光客の増加だけではない。特筆すべきはボランティア「こえび隊」の活躍。学生から会社員、シニア世代まで延べ約1万人が運営にかかわり、情報発信や外国人対応などに当たっている。かつて四国八十八カ所の巡礼者を手厚くもてなしてきた「お接待」の心が、瀬戸芸を契機に新たな形で育まれようとしているのだとしたら、インバウンド効果うんぬんより遙かに喜ばしいことと受け止めている。

四国新聞社　執行役員　東京支社長兼広告部長　泉川誉夫

香川のインバウンド戦略の核となっている瀬戸内国際芸術祭